

堺伝受における『古今和歌集』講釈

——中庄新川家蔵 古今和歌集聞書（仮題）をめぐって——

小 高 道 子

東常縁から宗祇に伝えられた古今伝受は、三条西実隆の他、近衛尚通・連歌師肖柏にも伝えられた。このうち実隆に伝えられた古今伝受は三条西家の秘伝となり、細川幽斎を経て智仁親王に伝えられ、御所伝受の基盤になった。肖柏に伝えられた古今伝受は、肖柏が宗祇に伝えた資料を幽斎が手にして継承した以外、資料に基づいて研究されることはなかった。

『顯伝明名録』を見ると、多くの連歌師に「古今伝授」と記されている。三条西家で秘伝として継承された古今伝受とはほど遠い状態であると推測されていた。

このたび国文学研究資料館の調査で中庄新川家に所蔵される堺伝受における講釈聞書と推定される一紙（整理番号

一七 一五〇 一（二））を拝見した。内容は『古今和

歌集』春上部の七～二十七首目までの注で、詞書と作者、そして和歌の一部を引用した後で、その和歌についての解説を付す。余白や行間に書き入れが見られ、また見せ消ちや補入字の上から重ねて書いて訂正するなど、書写に際しての訂正が多い。さらに例えば十八首の和歌・注では、和歌でも注でも「野守」を「森」と記すなど、同音異義語の漢字の誤りも見られることから、書物を目で見て書写したというよりはむしろ、耳から聞いた内容を筆記したものと推定される。本文については同館の『調査研究報告』に解題と翻刻を載せた¹⁾。本稿では、聞書の内容を検討することにより、堺伝受について考察を加えたい。

一 『古今和歌集』 第七首

新川家蔵『古今和歌集聞書』（以下『新川家聞書』と略す）は『古今和歌集』第七首から始まる。はじめに『新川家聞書』を引用する。

心さしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とミゆらん

折と居にかけて云説あり、枝を折と心を染て居る、定家八折と也、そめて也、

し八助字也、

定家の折にて八、下かすまぬ枝を折てノ初て雪とミたと八すまぬ也、

古来の説よし、

きへおふせぬ、きへやらぬと云也、手て取て花とノまかふ事なし、折ぬうちのそなた所ノサマ也、

「おる」について、「折る」と「居る」の両説があり、定家は

「折る」とするが、「古来の説」の方が良い、という。解釈について定家説を用いて解釈を伝えることから、一見すると、いかにも古今伝受の聞書のように感じられる。しかしながら、この「定家説」について、肖柏の講釈を聴いた宗訊の『古今和歌集聞書』（古聞）は、「折る」と解釈する。また、「定家」の名は見られない。

おりければ、居るといふ説不用之、折ける也、哥の心は、我にても人にても春の雪のながら折たるをよめるなり、心さしをふかくそめて折ければ雪と花とみえけるそといふ心なり、らむとあるもうたかえるにはあらず、詞をいたはる故二覽とよめる也、又はおりければにや花とみゆらんとよめる云々、きえあへぬとは、春の雪の心也

『古聞』では「折る」と解釈している。また、「定家」の名もみられず、説明しているテニハも異なる。『新川家聞書』は、『古聞』と同じく肖柏の流れを汲む聞書であるが、その内容は『古聞』とは大きく異なっているのである。ここで、肖柏の師である宗祇が東常縁の講釈を聴いた時の『両度聞書』と、『新川家聞書』とほぼ同時代に宗祇から三条西家に伝えられた古

今伝受を細川幽齋が聞書した『伝心抄』⁽⁵⁾とを比較してみよう。

『両度聞書』

おりければとは、折ければ也。心は、こゝろぎしをふかくそめておれば、たゞきえあへぬ雪が花とはみえける也。又折ければにや、きえあへぬ雪の花とみゆらんともいふなり。きえあへぬ雪とは春のゆきのさまなり。

『伝心抄』

此おりケレハヲ居ノ字ニ云説アリ甚不用、枝ヲ折也。物思ひヲレハウラヒレヲレハナトハ居ノ字ノ心也ト定家ノイハレシ也。哥ノ心ハ心サシヲタカクテ雪ト見タラハヲラシヲ花トミテ折リタル也。雪力花ト見えタルト云ハ他流也。当流ノ心ハ花ト治定シテ雪ト見タル心也。此哥ノ花桜ニテハナシ雪ヲソヘタル程ニ梅也。又花ヲ本ニスレハ落梅也。サナケレハ残雪ノ哥也

裏ノ説ハ我心ヲ信シソトノ義也。似タル事カアル程ニト云教也

宗祇の流れを汲む四種の講釈聞書の中で、おるを「居る」と解釈するのは、『新川家聞書』のみである。また、「定家」説は、『古聞』、『両度聞書』には見られず、『伝心抄』のみに見られる。ただし、『新川家聞書』と『伝心抄』とは、「定家」説が逆になっている。テニ八についての解説は、『新川家聞書』と『古聞』にのみ見られるが、説明するテニ八が異なっている。こうしたことから、『新川家聞書』の内容は、他の三種の聞書と、大きく異なっていると言えよう。「おる」に「居る」と「折る」の両説があることは、四種の聞書がそれぞれ伝えていいる。しかしながら、その内容と伝え方が、それぞれ異なっているのである。宗祇から古今伝受を受けた三条西実隆と肖柏の門弟は、古今伝受の内容を互いに交流することなく、別々に相伝を繰り返していったと推定される。相伝を繰り返すことにより、その内容がそれぞれ変化していったのであろう。また、内容は異なるものの、テニ八についての解説が、『新川家聞書』と『古聞』にのみ見られ、しかもその項目が異なっていることも興味深い。堺伝受を受けた連歌師は、古今伝受における『古今和歌集』の講釈を通じてテニ八を学んでいたのであろう。次に、『古聞』と『新川家聞

書に見られるテニ八についての記述を比較する。

一一 『新川家聞書』と『古聞』

『新川家聞書』に伝わる和歌について、『新川聞書』と『古聞』の、テニ八についての記事を抜き出すと次の通りである。『新川聞書』に見られる記述を○、『古聞』に見られる記述を・で示した。

7 心さしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花と三

ゆらん

○そめて也、し八助字也、

○きへおふせぬ、きへやらぬと云也、

・らむとあるもうたかへるにはあらず、詞のたすけ也、
詞をいたはる故二覽とよめる也、

10 はるやとき花やおそきと聞わかん（鶯だにもなかずもあるかな）

○ヤ、ウタカヒ字也、とき八とく来たのか、花のノ遅キ

ノカ、鶯に聞たらシレル、鶯さへも鳴カヌ也、
○だにもなりとも也、爰八さへも也、

11 春来ぬと一人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあら

じとぞ思ふ)

○なかぬかぎり八あひた也、

○あらじとぞ思ふ八、そう八あらじとぞ思ふ也、

12 谷風にとくる氷の（ひまごと）にうちいづる浪や春のはつ

花)

○浪やノヤ八、かた疑といふ也、春の初花ノならんといふ心を、ならんといわす聞ス也、ひしも一つノ伝事也

17 春日野八（けふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり）

こもれり)

○やくな八野をノヤケバ興ナキ故ヤクナ也ノなやきソ、
けふハヤク事ナカレ、ナ焼キソ、な上はヲサヘル也、ナト云へ八、ソト云ウハツ也、

18 かすかのゝとふ火の森（いでて見よ今いくかありてわか
なつみてむ）

○つみてんと八つまふぞ也、

19 名山二八（松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつ
みけり）

○此八八、わくるてにはといふ也、是八是ノとわかる心
也、

○きえぬにをのべんと、きへなくト云也、

20 梓弓おして（はるさめけふぶりぬあすさへふらばわかな
つみてむ）

○さへ八ものを添てそ也、

○あすへ降ら八、八に草花そへまし、つまんと也、

22 春日のゝ若菜（つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくら
む）

○ふりはへ八うちはへと同し、袖をつらなてと同しノは
へる八延の字も書、

23 春のきる（かすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべ
らなれ）

○うすミ、衣のたてぬきのうちのうすきを云、うすミ間
ミのてには、うすふしてト云心也、

○こそも在中より取出して云もの也、是こそ我ノみなれ
といふ二同し

○へら也ト八古今始てヨム、後少々ノアレトモ、万二八
なき事也、べきなれ也、へらともべしともノへきとも也、
・へらなれとは、みたれつへしき、といふ心といへり、
又さもあらずとも

27 あさ緑（いとよりにかけてしらつゆをたまにもぬける春の
柳か）

○玉にもぬけるとのてには八上手なる故ナリ、

○白露を玉にもなしてぬける柳の糸かな也、か八かな也、
誠の玉と見せ、誠の糸と見せたる柳哉となり、玉になし
てもつらぬく柳哉と也、

『新川家聞書』が十九項目あるのに対して、『古聞』は二項

目である。そのうち二項目「べらなれ」は共通するが、注釈内容は異なっている。新川家の古今伝受については、肖柏以降の系図が伝わり、師から弟子へと相伝を繰り返していたと推定できる。それにもかかわらず、その内容が『古聞』と異なるのは、相伝を繰り返す中で講釈内容が変化していったからであろう。また古今伝受の聞書でありながら、『古今和歌集』の解釈以上に、その解釈のもとになるテ二八の説明が多いことも注目されよう。

三 かた疑

『新川家聞書』第十二首の注釈には、「浪やノヤハ、かた疑といふ也」と記す。「春の初花ならんといふ心を、ならんといわず聞ス也」とあるから、疑問を示す「や」を、「らん」などと共に使わずに単独で使ったことが「かた疑」なのである。『姉小路家手似葉伝』には、「うたかひのや」「是はつねにやとつたかひて下ならんととむる類也」「とあるから、『うたかひのや』は、『下ならんととむる』ことが多かったのである。」「下ならんととむる」「ことなく」や「を用いる」

とを「かた疑」というのである。そしてこの事は秘事の一つであったようで、『新川家聞書』は「ひしも一つ々伝事也」と記す。

連歌師のテ二八秘伝については、綿坂豊昭氏が「や」に着目して記されているが、そこには「かた疑」については挙げられていない。『国語学大系』を一瞥すると、『春樹頭秘抄』に見られるが、『春樹頭秘抄』には見られない。

『春樹頭秘抄』

- うたかふや ○花や咲らん ○露や置らん の類也
 ○うたかひてすつるや 袖ぬらせとや ○物おもへとや のたくひなり
 ○はかるや たとへは
 千載おほつかなおほつかななるまの嶋の人なれや我こと
 の葉をしらすかほなる
 ○みちしあれや ○いとまあれや 同しくおしはかりた
 るやの字なり

『春樹頭秘増抄』

一、かたうたかひのや

新古 散ぬれはにほひはかりをむめの花ありとやこゝに
春かせの吹

同 涼しさは秋やかへりてはつせ川ふる河のへの杉の
したかけ

一 うたかひすつるや うたかひていひ捨たる也
風雅 九の澤になくなるあしたつのを思ふこゑは空に
聞ゆや

後撰 しら河の滝のいと見まほしけれとみたりに人をよ
せし物をや

金葉 あぶことはなに江にあさるあし鴨のうきねをなく
と人は知すや

一 はかるや をしはかる也

古今 ふゆ河のうへはこほれるわれなれや下になかれて
こひわたるらむ

通しあれや いとまあれや なといふもをしはかる
也 あれやはあるや也 なれやはなるや也

『二八秘伝の研究』の索引を検索すると、『竹亭和歌読方条
目』の一例のみ、指摘されている。

抑和歌の道の増長せる事をいへるに、とをき所もいてた
つあしもとよりはしまりて、とし月をわたり、たかき山
もふもとのちりひちよりなりて、あま雲たなひくまでお
ひのほれるとは、功のつもれるにはあらずや。今所書の
事とも、たやすきやつなれとも古美口伝不出此条目者歟。
先賢のをしへみつからむちうち、みつからはけますにあ
るのみ。おろそかにおもひてはいつれの道か成就をえん。
あなかしこ〜。

85 一 和歌はてにをはを以て一首をつらぬ。詞の外に
心をふくむもみな是なり。いさゝかもたかひぬれは一
首さたかならず。至要の事也。秘口の沙汰は深切の志
を見侍りて、次第してつたふる事なり。まつさたまり
たる作例をさししめすものなり。

86 「くちあひのや」から「100 とや」まで、やの
説明、略)
91 一 うたかひのや やとつたかひて、らんととむる類

なり。

花やちるらん はるや立らん やとやからまし き
みやこし

92 一 かたうたかひのや 下にかゝへの文字なくてい
ふ也

ちりぬれは匂ひ斗を梅の花ありとやこゝに春風のふ
く

同書は、序に見られるように⁽⁶⁾、連歌の秘伝書というよりはむしろ、和歌の秘伝書といえよう。そこには「かたうたかひのや」について、例歌をあげて説明しているのである。これらの例から推測すると、『新川家聞書』にみられる『古今和歌集』の講釈は、『古今和歌集』を通じて和歌・連歌を詠むためのテニ八を伝えるためにも行われたと推察できる。そのため、例えば三奈西家に伝えられた古今伝受からは想像しがたい多数の伝受者が見られるのであろう。堺伝受における講釈は、一子相伝、器の水を器に移す、といった形式を取らず、師弟関係の中でテニ八秘伝を含む内容が継承された。そのため、多くの連歌師が古今伝受を受け、その内容も相伝過程

で変化していったのであろう。『新川家聞書』は、こうした堺伝受の実態を伝える貴重な資料といえよう。テニ八以外の講釈内容については、稿を改めたい。

注

- (1) 国文学研究資料館『調査研究報告』三七(平二九・三)号掲載予定。
- (2) 引用は『斯道文庫論集』による。
- (3) 注(7) 研究書に倣い、本稿では「テニ八」の表記を用いる。
- (4) 引用は『中世古今集注釈書解題』三による。
- (5) 引用は古今集古注釈書集成による。
- (6) 引用は国語学大系による。
- (7) 「連歌系秘伝の伝流」(『テニ八秘伝の研究』平一五勉誠出版)
- (8) 引用は近世歌学集成による。

付記

本稿は、国文学研究資料館の新川家文書調査をもとにしています。貴重な資料の調査・紹介を御許可下さいました新川家に深謝申し上げます。また、本稿は、新川家文書研究会

(鶴崎裕雄代表、近藤隆敏・山村規子・大利直美)における
口頭発表に加筆したものです。御助言を下さいました鶴崎先
生をはじめ、会員諸氏に深謝申し上げます。

(国際教養学部教授)